

岐阜県農政審議会計画策定部会（第2回）開催結果

1 日 時：平成27年4月24日（金） 13時30分～15時30分

2 場 所：岐阜県水産会館2階中会議室

3 出欠状況

（出席委員）

岩佐 正行	（岐阜県農業協同組合中央会常務理事）	
大野 二三	（岐阜県女性農業経営アドバイザーいきいきネットワーク会長）	
菊本 舞	（岐阜経済大学経済学部准教授）	
中野 雅敏	（イオンリテール株式会社 東海・長野エリア政策推進チーム）	
林 智子	（生活協同組合コープぎふ組合員理事）	
西村 寿文	（全国農業協同組合連合会岐阜県本部副本部長）	
前澤 重禮	（岐阜大学応用生物科学部教授）	
和仁 松男	（岐阜県農業参入法人連絡協議会会長）	以上 8名

（欠席委員）

興膳 健太	（NPO法人メタセコイアの森の仲間たち代表理事）	
土川 洋功	（岐阜県青年農業士連絡協議会会長）	以上 2名

※50音順

（水産振興関係者）

白瀧 治郎	（郡上漁業協同組合参事）
-------	--------------

（県）

農 政 部	部長
農 政 課	課長、技術総括監、笠松競馬支援室長、水産振興室長
検 査 監 督 課	課長
農産物流通課	課長
農 業 経 営 課	課長
農 産 園 芸 課	課長、花き振興企画監
畜 産 課	課長、畜産指導監、家畜防疫専門監
農 村 振 興 課	課長、鳥獣害対策室長
農 地 整 備 課	課長、技術指導監

4 議事

議題1 県が取り組むべき大きな課題について

- （1）中山間地域農業の振興について
- （2）国際化に対応できる農業づくりについて
- （3）世界農業遺産を契機とした農村振興について

5 議事要旨

別紙のとおり

別 紙

岐阜県農政審議会計画策定部会（第2回）議事要旨

1 開 会

2 農政部長開会あいさつ

- 現行の計画の最終年度になる。強い農業の推進、攻めの農業の展開、それらを支える担い手づくりなど、5本の柱で最終年度を頑張っていきたい。
- 本日は2回目だが、県が取り組むべき大きな課題の3つをご検討いただきたい。

3 議 事

（前澤部会長）

- 計画策定部会は最終的には基本計画の冊子を作り上げることが目標。そこに埋め込む情報・要望をここで出していき、会議を重ねて構成を考える。
- 今回から本格的な審議に入る。県が取り組むべき大きな課題ということで、3つある。3つに分けてご説明いただき、皆さんからご意見賜りたい。

（1）中山間地域農業の振興について

- 農政課・雨宮技術総括監から資料1に基づき説明。

（前澤部会長）

- 和仁委員から自身の取り組みを踏まえて、中山間地域の農業の課題と取り組みの方向性についてお話いただきたい。

（和仁委員）

- 建設業から農業を始めて14年となるが、県の支援がとても支えとなった
- 約280枚の田んぼを管理。労力軽減のため、作業総合管理ソフトの開発、データベースを基にしたトラクターの無人化、ドローンを活用した飼料用米の直播を考えている。
- 獣害対策を自分たちでやろうということで獣害対策のプロジェクトチームを立ち上げたが、くくり罠の設置数の上限や麻酔銃の使用など、規制や資格の問題がある。
- 鳥獣害は、非常に心配で、地域がだんだん猪に攻められている。そのうち観光地にも猪がくる。そうなる前に、適正な手を打ってほしい。
- 飛騨高山の美味しいお米プロジェクトとして、高山市とJA飛騨と稲作農家が集まってプロジェクトを立ち上げた。一昨年から、ブランド米を作って販売している。
- 和仁グループは、ブランド米とWCSしか作付しない。今年は作付前であるが、主食用米は注文でほぼ完売している。売れない米は作らない。残りはWCSへ移行する。
- 有機たい肥の製造施設は、4月に無償譲渡され、維持管理していかなければならないが、この堆肥がないと高位品質な米が収穫できないと思っている。
- 機械が入っていけないような農地を中間管理事業で基盤整備してほしいと言ったら、農業振興地域でないためできないと言われた。

- 耕作放棄地の再生は、市の補助制度を活用してやっていける程度で、国の補助事業だけでは赤字になる。
- 里山林整備事業で、搬出道について林政部に要望したが、木の搬出はビジネスに繋がるため補助対象にならないと言われた。現地に残した木は、鳥獣害の温床となっている。
- 小さな谷に倒木があり、集中豪雨で土石流の発生の恐れが高まる。そうなれば、施設整備をしようと、農産物を作ろうと、地域が持たない。間伐すれば倒木を抑制できる。
- 材木を出せば商売になるというが、利益が出るなら森林組合がとっくにやっている。バイオマス発電などで管理経費を賄うことが必要なのではないか。
- 地域との連携では子どもたちと環境調査を行っている。農業は楽しいと知ってもらい、1割程度の子供が残ってくれればうれしい。
- 上宝町は「小さな拠点」でいい。他の地域の参考になるような地域づくりの小さな拠点を目指し、ご指導、ご支援をいただきたい。
- 人口減少、住民の高齢化が進む中、きれいな風景を維持し、都会の人たちがこの飛騨の地域に来て、子育てが出来るような体制づくりに貢献したい。
- 少子化対策のためにも、施設を作るのではなく、一家が生活できるような給与（所得400万円）をもらえるようになることが必要。

（中野委員）

- 岐阜県だけでなく他県でも同じような話を耳にしている。そういった地域の一番の問題は、後継者問題。農業だけで解決できないのは、婚活の問題であるかなと思った。
- その解決のために、ある中山間地域で、都会の女性と婚活しようという取組みを今手がけている。秋田県で1回目を実施し、成果が出つつある。
- 今年、岐阜県で取り組めないかと計画している。岐阜の中山間地域の良さをPRするとともにそういった後継者問題も一つ解決できると考えている。

（西村委員）

- 農山村の中には、小学校は少人数学級で、子供を産んで、教育を受けられるのか不安になり、若者が地域外に出てしまう悪循環になっている。
- 和仁農園さんの活動のように、地域の中で生計を立てることがいいと思う。
- 新規就農で食べていくのは大変なことで、農業就職ならある程度やれるのだが、自力での就農は思い切ってできないと言われる方が多い。
- 会社として、地域として、農業をやって、若者を迎え入れる仕組みが必要。それを民間だけでやるのは難しいので、JAグループや行政を含めて仕組みを作っていないと、中山間地域で農業をやって地域を守っていくことができない。

（和仁委員）

- 30haを前提とした水田の新規就農で、販売は外部委託とすると、設備投資から在庫管理まで含めると1億円近く必要となる。この規模の米の新規就農には大金が必要。
- 和仁農園の米の生産原価は250円/kgかかり、系統出荷では経営が成り立たない。自分で売るとは大変だが、消費者には高くてもおいしいものを作れば買っていただける。

（岩佐委員）

- 所得を安定させるのが一番大事。和仁農園さんが言われるように所得目標は400万。
- これから新規就農は、既存の農家の後継者、法人への就業、所得の機会を増やすなど、

どうやって400万を稼がせるか、それに向けた政策を集中的に立てる必要がある。

- 他地域から人に来てもらうためには、暮らしやすい環境が必要で、道路、病院、農村地域からのアクセスなど、農政部だけでは解決できない問題がある。

（大野委員）

- ハウスを建てる場合、新品の場合でしか補助が出ない。新規で始めるときにはお金がかかるので、中古でも使えるものならそれなりに補助してほしい。
- 少しでも安く農業ができる環境を整えてあげたい。施設がきちっとしていれば、中山間地域でも収入が上がる。

（菊本委員）

- 現在、トレンドとして、若い世代に田園回帰の志向があると言われている。従来、若者は都市への志向が強いと言われていたが、今の時代、そうでない流れができつつある。
- 農業に関わりたいと考える学生が少なからずいるが、実際には就職口がなかなかない。大学生の働く場として農業、農村という選択肢が出来ないかと考えている。
- 移住・定住政策ということで、すでに都市でPR活動をやっておられるが、今後、そうした政策を今回の計画の中でも取り入れていただけたらと思っている。
- 特に子供たちの関わりが一番だと思う。中学生くらいまでは地域の学びの場があるが、中学を卒業した後に農業・農村・地域に関わる機会を増やしてことが必要。
- 実際に集落機能を維持することを考えたときに、人口が減少し、働く場がないところでは難しい。

（２）国際化に対応できる農業づくりについて

- 農政課・雨宮技術総括監から資料2に基づき説明。

（前澤部会長）

- 西村委員から、農産物の販売、輸出の課題、方向性に話題提供いただく。

（西村委員）

- 米については、米価の下落が続き、コストダウンや規模拡大だけでの対応は難しい。
- 県産米については、いかに消費者や実需者に、この米なら買いたいと言ってもらえる米を作り、価値に見合った価格を付けることを目指さなくてはいけない。
- 昨年、全国の食味ランキングで飛騨コシヒカリが特Aをとったが、ほかの銘柄もそれを目指して、おいしい米、特色のある米を目指さなくてはいけない。
- 野菜については、青果物として、おいしくて、鮮度の高いものをやれば残る道もある。
- 輸入野菜は、惣菜や加工に使われている。加工原料は安いので、キャベツ、玉ねぎなど大量に使う露地野菜について、水田農家に対し機械化に対応した野菜作りを推進し、1キロあたりおよそ10円で合わせていただくような生産に向けて推進している。
- 県産農畜産物の輸出について、もともと農業所得の向上が一番の目的で、将来的に国内需要が減っていくのに対応して、外に向かってやらなくてはいけない。
- 飛騨牛の5等級の肉は高級でおいしいが、今後、高齢化で消費が減少する可能性がある。飛騨牛の特色を生かそうと考えると、海外に消費を求めていかななくてはいけない。
- 輸出された飛騨牛を食べた人が、高山に来て食べたいという効果もあると考える。
- 飛騨牛はかなり高い相場で取引されている。時期によって変化するが、年間計画に基づいて、牛をどう確保するかが課題。高級部位が中心で、そのほかの部位はセットで売

っていく必要がある。

- 輸出先国によっては認可が下りている施設でないといけないので、飛騨ミートは、かなりのお金をかけて整備しているが、コストに見合う頭数を処理できていない。
- 全農としては、「和牛」をもっと世界に売り込もうということで、その一部として、飛騨牛をきちんと売っていく取組みもやっていかなくてはならない。
- 富有柿は、国内生産量に波があり、20～30tと年によってばらつきがある。生産者を含めて戦略を決めなくてはならない。防疫対応に手間がかかってしまうのも問題。
- イチゴは79kgだが、傷みを抑制するため包材コストが嵩み、売れ行きは悪くなってしまう。
- 生産者には安心していいものを作ってもらい、それに見合う需要をつくるために、輸出は必要な取組みであると考えている。

（和仁委員）

- 畜産農家と連携してWCSを作っている。輸入飼料が高く、今のままでは繁殖経営の採算が取れない。繁殖ができないなら、飛騨牛ができない。
- 外国へ売る前に、生産者が成り立つような考えでやってもらうことが必要。

（西村委員）

- 子牛も元牛も非常に高い値段になっており、肥育農家も大変である。

（中野委員）

- 昨年、飛騨牛を香港で販売させていただいたが、非常に好評だった。
- 中国やカンボジアなど海外に目を向けており、農産物の出口を担う我々の業界を活用して欲しい。
- 同時に、行政と一緒に農産物をPRしていかななくてはならないと感じている。
- 例えば、富有柿は、岐阜エリアに住んでいても、岐阜が発祥とは知らなかった。柿というと奈良、和歌山というイメージを持っていた。
- 他の県産品もPR不足である。一消費者として、我々の目に留まっていないし、他県に比べてPRの仕方が違うと感じる。
- 消費者に岐阜県農業を応援してもらうため、流通も交えて、国内外へ岐阜産の農産物をもっとPRしていかななくてはならないと思う。

（3）世界農業遺産を契機とした農村振興について

- 農政課・雨宮技術総括監から資料3に基づき説明。

（前澤部会長）

- 郡上漁協白瀧参事から、清流と鮎という視点で地域の活性化についてお話しいただく。

（白瀧参事）

- 平成19年には、「郡上鮎」ということで地域団体商標の登録をした。当時水産物としては、「大間のマグロ」など8品目の魚類が登録された。
- 商標と合わせて、郡上鮎の認定店制度を導入し、9割以上が市場出荷だったのが、現在では5～6割が直販になり、販売価格が安定し、出荷意欲の増大に繋がった。
- 鮎の品質を守るためには、川の水の供給源である、いい山を作ることが必要。
- 「長良川源流の森育成事業」と銘打って、山の木を切ったところを借りて、ボランティア

ィアとともに木を植えて、5年間面倒をみる取組みを始めたが、鳥獣被害が問題となっている。

- 長良川の流域には水とともに育まれたものが沢山ある。水舟の文化を始め、美濃和紙、守口大根などの水や肥沃な大地に育まれた農業がある。
- 鮎を利用するためには、鮎を獲る人間がいなくてはいけない。漁協、河川漁業は生計を立てられるものではないが、重要な産業である。釣り人を増やすことが必要。
- 後継者育成は非常に大切で、子どもたちに川の楽しさを知ってもらうため、川遊びや、放流の手伝いをしてもらっている。
- 県が「長良川あゆパーク（仮称）」を整備すると聞いている。その施設をうまく利用して、伝統漁法を守り、内水面漁業を振興していただきたい。
- 世界農業遺産は、鮎だけでは無理である。「里川システム」の保全、継承により、清流長良川の鮎がいつまでも減ることのないようにしていかななくてはいけない。
- そのためには、天然鮎を増やす必要がある。長良川漁業対策協議会で、鮎の発眼卵の放流事業を始め、現在では1億粒くらいの卵の放流を行っている。
- 琵琶湖産の鮎の放流が主流だったが、湖産の鮎は、海から上り、海へ下り、また川に戻る鮎とは明らかに違う。天然魚が海から上る川には、同じ川の魚を放流することが大事。
- 「清流長良川の鮎」について、鮎に関わる人だけでなく、農業者、林業者、観光を営もうとする人がうまく関わられるような施策を考えていただきたい。

（西村委員）

- 清流を活かして、農村を活性化していくのに、観光、漁業以外でどういう観点があるのか。

（白瀧参事）

- 農業がうまく機能しないと鮎は育たない。農地によって魚は守られている。
- 魚を食材として考えたときに、農産物と合わせた利用ができる。加工するのか、お客さんにその場で食べていただくのか、考えると面白いことが色々できるのではないか。

（菊本委員）

- 全体にかかる部分だが、農村という空間をどう考えていくか、理念のようなものを、この中に打ち出していただけたらと思う。
- 売れる農業、勝てる農業を産業として作ることと、住みよい空間づくりをしていくことは、ある局面では対立する視点を含んでいる。
- 売れる農業、打ち勝てる農業、対外国を想像しながらも、上流から下流まで一体的に、文化や暮らしを発信できるようなものとして、漁業や農業などは位置づけられるべき。
- 岐阜県の個性としては、海を有していない県ということで、「清流」というのは大きなキーワードだと実感した。
- 「清流」というキーワードを大切に、里山、里川を損なわず、地域の中で暮らしていける暮らし方、それを外にも発信していく、そういったこと議論していけるとよい。

（前澤部会長）

- 今後の計画に関しては、これまでと違った広い視点を持った農業政策、農業だけでは対応できない問題への対応が必要である。

6 閉 会

- 農政部長から閉会挨拶。